

体育における集団機能の科学的研究

—チーム・ワークについて—

竹 内 京 一

Kyōichi TAKEUCHI ; The scientific research of group function on physical education.

Received January. 19, 1965

目 次

- 1 体育と集団研究
- 2 集団研究とチーム・ワーク研究
- 3 チーム・ワーク
- 4 体育とチーム・ワーク

1 体育と集団研究

体育が人間形成の一つのいとなみであるかぎり、体育の個々の目標がつねに教育共通の目標につらなって設定されていなければならないし、学習指導もそれらの目標を達成するように展開されていることが必要である。教育の対象とする人間は、全人であり、社会的人間であることは、もはや現代においてあまねく認めているところである。したがって、過去において、身体の成長発達を目標にして、体力や基本能力を養うことに終止した体育は、体育を身体だけの教育として、考えていたものであって、体育における人間形成としての機能の大半を果していないことになる。また、身体を精神的に形成することが体育であるとして精神を身体に優位におく理論も、体育の一面の真理をあらわしているが、現実存在する人間の把握としては抽象的である。このように身体価値の強調や、身体を精神化の理論は、たしかに一面的に認めることはできるが、現代にもとめられる人間は、もはや抽象化された個人でなく、大きさ、構造、機能のちがったさまざまな集団に所属し、所属集団の理想、目標、生活様式に適応しながら生活している社会内成員としての人間だからである。このような人間を理解し、その形成を企てるには、集団における人間の分析や集団自体の理解をふかめていくことが大切である。（以上「体育と人間関係」引用）

体育はもともと、この集団内人間の育成や集団的行

動の助成に多くの可能性をもっているし、しかも現実の社会が競争と協同に織りなされているように、体育における集団も多くは競争しながら同時に協同している。さらに、集団の成員は互に任務を分担し、ルールをつくり、リーダーをえらび組織をつくって行動している点も、きわめて又現実の社会場面に近似している。だから体育の取り扱う多くの集団は、社会の縮図ともみることができる。ここにおいて、体育における人間形成を図るには、集団構造や人間関係の力学など、集団の研究が必要である。

ここでいう集団とは、Krech, D の「集団は相互に明確な心理学的関係をもった2人あるいはそれ以上の人の集り」と、Lewin, K の「集団とは、その成員が緊密な相互依存によって、特ちょうづけられる力動的全体である」という二つの定義から、「精神的に交流し、相互に依存関係をもつ2人以上の集り」と解し、しかも Cooley, H の一時的集団の概念から発想し、Bales, F. の研究から由来した社会科学の概念から組織されたところの小集団を対象にする。

体育における小集団研究のもう一つの重要な領域は、集団の機能の研究である。

集団の機能として、オルムステッドは、1 個人に対する集団の諸機能 2 組織に対する集団の諸機能 3 社会に対する集団の諸機能にわけて説明しているし、浅井浅一は、機能を集団の個人におよぼす影響としてとらえ、体育との関係から、教育的機能として、1 集団は成員を保護する 2 集団は成員を同一化する 3 集団は成員を学習させる 4 集団は個性をのばす の四つに分析している。その他多くの著名の集団研究者は、例外なく機能面についても研究をすすめている。

体育が教育の一つのいとなみであるとするならば、

この集団の機能を十分に理解し活用していくことによって、その効果を期待することができる。現在の学校体育の展開が、体育は、問題解決学習であるという考え方から、学習の形態を集団による学習（グループ学習）にすることが多く、そのなかでは、チーム・ワークの体験とそれによる人間形成をもとめている。

しかし、このチーム・ワークという概念内容、もしくは実態のうけとめ方は一様ではない。また、学校体育や、スポーツの領域だけにとどまらず、会社、工場、官庁のごとき組織体や、研究団体や、演技する団体においても、よくチーム・ワークがとりあげられている。そこで、チーム・ワークとは一体如何なるものなのかを、「チーム・ワークは集団のある状態であって、其処には、いくつかの機能的要因が存在する」と仮定し、この解明を、小集団研究の立場から究明しようとするのが本論文の目的である。

II 集団研究とチーム・ワーク研究

チーム・ワークの研究は、何処に問題意識をおくかによって、その究明のしかたは一様ではない。たとえば、ゲゼールシャフトを現代社会の特質ととらえるならば、現代社会では、コート（領域）をもつ集団社会が存在しており、この集団社会では、チーム・ワークが尊重されている。この集団社会の要求するチーム・ワークとは、如何なる人間関係の力学をもっているものであろうかと考えるところにあらわれるし、20世紀は、スポーツの世紀であって、とくにチーム・ゲームの発達、20世紀のスポーツの特質である。そしてこのスポーツの集団においては、チーム・ワークは単的にあらわれている。したがって、集団社会に必要なチーム・ワークという機能を理解するためにチーム・ゲームに関心をもつものが多くなってきている。そのために、チーム・ワークの研究は、社会に貢献することになるし、体育においては、社会生活に必要な態度を養うことを目的の一つにしているから、この目的を達成していくために、チーム・ワークの指導が大切になっている。したがって社会的態度の学習効果をたかめるためには、チーム・ワークの分析的研究が必要になってくる。スポーツにおいては、オリンピックやその他の選手権大会などでよい成績をおさめようとする、ここにスポーツのコーチングメソッドが必要になってくる。このスポーツに関するコーチングメソッドをあきらかにし、その効果をあげていくために、チーム・ワークの研究が求められる。このように、問題意識の所在によって、目的は異ってくるし、したがって研究法も対象も異なるであろう。

いま、Sprott, H の述べている言葉に眼をとめて

みると、彼は、「あなたがフットボールのようなゲームをしているとしよう。このゲームでは、味方を敵も同時にゲームをしている。あなたは、ボールを足でさばく。あなたがボールを思った方向に蹴るとき、テニスの場合のように、他の一人だけを考慮しているだけではない。その状況によって、あなたが、ボールをパスする人から、ある種の反応を、あなたの味方からは、他の種の反応を、さらに、敵のチームからは、別の種の反応を引きおこすといったような仕方であつた。あなたは、ボールをキックしなければならない。あなたの活動の方向を決めるために、関係者全員もしくは、その多くの人びととの反応について、全般にわたって、こみ入った反省をしなければならない。Meed, H はこれを『一般化的他者』とよんでいる。

個人がこのような状況のなかで行動することは、Meed の言葉によれば、『個人が、そのチームの自分以外のあらゆる人と、イコールであるということによって——少くともそのような態度が、彼自身の特定の反応に影響を及ぼすかきりにおいて——統制されている。そこでわれわれは、同一の過程にふくまれる人びととの一つの組織である“他者”をえるわけである』といっている。これは彼の見解では、社会化のうちに起こるものである。一般化的他者の態度は、共同社会全体の態度なのである。

この引用した文は、チーム・ワークの状態を説明していると考えられる。

経験論的にみれば、集団があたかも一人の如く行動すると表現されるような、Meed のいう他のあらゆる人と、イコールである……ような、気持、団結、まとまりとして考えられる。一般には、この種のチーム・ワークの概念がゆきわたっている。

この経験論の把握に、たいしてソシオメトリーを適用し、そのチーム内成員間の結合関係をとらえて、網型結合をもってよいチーム・ワークと称していた。

元来は集団構造を洞察するのに理論的に役立てたこの研究法は、その実用性と比較的単純さのために今日においては、ほとんどすべての集団機能の研究に用いられている。このソシオメトリーは、被験者が、いたり、書いたりすることを記録するものであるから、主観的データであつて、その意味において長所と限界を有している。具体的な状況において実際に存在する諸集団関係や集団の緊張など、力動的な面はとらえられない。

そこで、グループ・ダイナミックスは、ソシオメトリーによる友好性選択によって測定されたものに、「凝集性」という概念を導入して、連滞をうみ出すために集団内で作用している「力」として考えようとする

る。この立場と考えられるチーム・ワーク研究には、グループダイナミクス学会研究会がおこなった研究のなかにみられる。

さらに、Sprott, H の引用文章にみられる、一定時点における状態を、Situation と同義とみると、行動が個人と環境の関数としてあらわれるという公式から、場の内部における種々の小部分ないしは、諸要素をかきたて、そして、それらに影響をあたえる諸力の場の概念をふくんでいる。したがって、或る時点における一つのキック、一つのパスを場の概念、いわば場の理論によって説明できる。このように場の理論は、集団機能の理解に役立ち、チーム・ワーク研究に適用することもできる。

Meed の主張、すなわち役割理論の立場から、自我形成の段階を指定し、社会的役割と自我と第一次集団との関係を追及した理論によっても、チーム内成員のポジションの関係として、チーム・ワークを追求することができるであろう。

また、人間関係力学の研究の理論と方法もそれが、行動を観察し、力動的関係においてその意味をとらえようとするから、人格交渉としての体育の場におけるチーム・ワークの研究に貢献する。

Ⅲ チーム・ワーク

体育における集団が社会の縮図といえるならば、体育におけるチーム・ワークを集団のある状態とし、この状態を構成する機能的要因を考察することは、社会のなかの集団機能として、チーム・ワークを理解するのに役立つし、学習指導に適用することもできる。そこでまず、はじめにチーム・ワークの既存の概念について考えてみたい。

1 チーム・ワークの概念

スポーツ辞典には、A group of players on one side actively taking part in a team sports. とある。後藤岩男はチームは集団の一種であるといっている。このことから、チームは、競争場面におかれ、組織が強固にしめされる集団の一種であると考えられる。このようにチームを考えると、そこにあらわれる集団機能を既述のスポーツ辞典には、このようなチームのメンバーによって、協同的にプレイされることで、これがチームスポーツの本質であるとのべ、フットボールチーム、サッカー、ホッケー、などにおけるチームメートに対する、パスや妨害、ベースボールのダブル・プレイの例をあげている。

社会学辞典にも、ほぼおなじく、人びとが共同の目的に向って協力しあう相互作用をいうのであると記している。

2 チーム・ワークの機能的要因

チーム・ワークの研究は、先きののべたように目的によって、研究法も根拠となる理論も異なると考えられるが、ここでは、体育において、チーム・ゲームを行なう場合に求められ、もしくはあらわれるチーム・ワークを明らかにするために、攻撃場面の成員の行動の観察を根拠にして、チーム・ワークの機能的要因を考察する。

1) 占拠性

占拠性とは、ポジションを占めることであって、このポジションは、そのポジションから規定される役割をおうている。いま、これをスポーツ用語であるチャンスといわれる状態(ex. シュートのチャンス)における成員の位置のとり方によって考察してみる。

註 この語については、未だ検討中である。

調査の手づき

期日 昭和36年8月21日

場所 京都学芸大学グラウンド

対象 京都学芸大学サッカー部員 6名

観察場面 長さ20m、巾15mのコート（ハンドボール用ゴールポスト2ヶ使用）で、つぎの条件によって、サッカー型ゲームを行なう。

- ・ゴールエリア内のシュートはみとめない。
- ・ボールは浮かせてはならない。
- ・時間6分—(5分)—6分

観察法 行動観察法（図示法）

観察の要点

- 1 シュートした位置
- 2 シュートしたときの防禦者の位置

以上調査の結果から、シュートする理想的な位置を求めるために、シュートが成功した点をおさえ(f_i)、各点からの距離が、最小なるように、直線を決定すべく、つぎのような方法を講じた。

- i ゴールラインをX軸にとる。ゴールの中心を通りX軸に垂直な線をY軸として、各点（シュートした位置）から、Y軸への距離 x_i 、X軸への距離 y_i を測定し、その平均値を求めた。

$$f_i = 11 \quad M_x = 292.7 \quad M_y = 527.7$$

- ii つきに標準偏差値をもとめる。

$$\lambda_x = \sqrt{\frac{1}{11} \sum (x_i - M_x)^2} = \sqrt{\frac{1}{11} \times 260984.08} = 154.3$$

$$\lambda_y = \sqrt{\frac{1}{11} \sum (y_i - M_y)^2} = \sqrt{\frac{1}{11} \times 81326.68} = 85.4$$

- iii 直線 $y = ax + b$ を決定するために、 $M_y = aM_x + b$ から、 $b = 366.72$ を求め、 $\lambda_y = a\lambda_x$ から、 $a = 0.55$ を求めた。

したがって、求めるシュート位置をあらわす理想的な

直線は、 $y = 0.55x + 366.72$ であらわされる。しかし、シュートの位置は、防禦側の成員の位置によって影響を受けるものであるから、つぎに、シューターに最も近い2名の防禦側成員の位置を結ぶ防禦ライン F を設定し、シューターの位置との関係を見ると、シューターの位置を P とすると、 P は、ゴールの中心を原点とし、ゴールラインを X 軸、ゴールの中心を通り、 X 軸に垂直な直線を Y 軸とする座標としてとらえることができる。したがって、防禦ライン F より、 P が上方にある場合は、 $y - (ax + b) > 0$ 、防禦ライン上にある場合は、 $y = ax + b$ 、防禦ラインを突破している場合は、 $y - (ax + b) < 0$ としてあらわされる。このうちで最もチャンスであるのは、 $y - (ax + b) < 0$ であって、いわゆるノー・マークの型である。

勿論、具体的な場面は、極めて複雑多種であるが、タイプ化してみると、以上のようなシュート位置の理想的直線と、防禦ライン上にあるほど、チャンスの状態ということができる。

このような、チャンスといわれる状態における位置は、単に、スポーツ構成上から設けられたポジションでなく、この時機に、この位置にあるもの（ここではシューター）には、シュートするという役割を荷っているのである。T.M. ニューカムは、規定された役割は、その地位にある者に要求される必要な機能を遂行するすべての承認された方法をふくんでいるといい、また、役割行動（Role behavior）は、役割を取得する特定の個人の現実の行動を意味するといっている。浅井浅一は、成員の活動する領域に変化があらわれ、すなわち行動の領域が変化すると集団の領域が小区分に分節し、そのことによって、成員の活動に変化があらわれることを実験的にあきらかにし、その結果役割が生ずるとしている。以上のことから、ゲームは力動的であって、行動は場面の変化とともに変化しているから、ある時点における成員のポジションは、前後の場面から規定される役割を荷って、占められるものである。

2) 連絡性

連絡性を、パス行動によってみると、それは、ポジションとポジションの間にあらわれる行動としてとらえることができる。人間関係理論では、これを相互依存関係としてみるが、単なるボールの受け渡しではない。おなじパスでも、ゴールに近いところと遠いところ、いわば division によって意味が異なる。そして意味あるパスが多いほど得点も多く、よいチーム・ワークをあらわす。だから単にパスが多くあらわれたということが直ちに、チーム・ワークにつながらない。それはつぎの調査によってあきらかである。

この調査は、技能のちがった三つの攻撃集団と一つの防禦集団を構成し、これに、バスケットボールにおける3対2の攻防を行なわせ、パスワークのあらわれ方を観察し、その結果を考察したものである。

調査の手づき

期日 昭和37年10月20日

場所 京都学芸大学体育館

対象 京都学芸大学バスケットボール部員8名、同サッカー部員3名

調査の方法

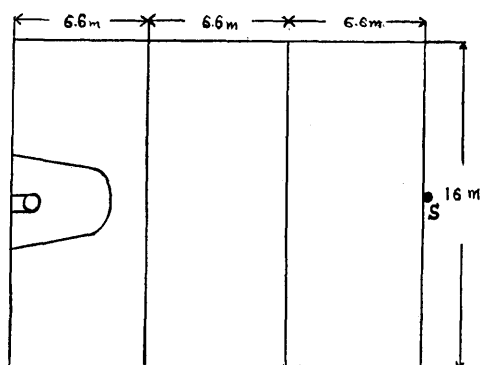
1) 集団の構成

攻撃集団として、技術が高い(H)、普通(M)、低い(L)の三集団、防禦集団として(2名)技術の高い(H)一集団。

2) 実験条件

- ① 防禦集団は3セットともかえない。
- ② 各セットは、10回の試投(攻防)を行う。
- ③ カット、アウト・オブ・プレーは1回の試投終了とする。
- ④ 攻撃は、所定の位置からはじめる。(図1 S点)
- ⑤ 実験場面(図1)

3) 調査法 行動観察法(8mm使用)



1 図

以上の調査の結果からみると、表1に示すように、どの集団にもパスはあらわれていて、パスの回数最も多いL集団がシュートの回数は最も少く、逆にパス回数の最も少ないH集団がシュートの回数は最も多い。このことから、パスが多いことが、ただちにパス・ワークがよいということにならない。よいパス・ワークは、一つ一つのパスが目標に向って体制化している必要がある。数が多いことよりも、如何に意味あるパスがあったかが問題になるのである。すなわち、ゴールに近く、シュート(目標)に直結するパスは意味があるのであって、遠い領域内でのパスが、多くてもそのなかには、無意味なものも多い。ここでは、H集団で

は、ゴールに近い領域内でのパスが他の集団にくらべて多く、L 集団は、ゴールに遠い領域内でのパスが多くなっている。このように、ゴールに向かって体制化されていくパスに意味があり、この意味あるパスが多く、得点が高くあげられるほどチーム・ワークはよいと考えられる。

表 1 成員の行動

gr.	行動	パス	ドリブル	シュート
L		63	3	2
M		39	5	6
H		36	7	8

3) 洞察性

集団はつねに共同の感情をもち、共同の目標を達成しようとする共通の意欲をもっている。集団は、その目標が明確になり、共同に意識されてくると、各成員は、その目標達成に向けて行動しようとする。そしてこの場合集団目標に成員がどれだけ強い誘意性をもっているかということと、もう一つは、この集団がどれだけ組織的に行動する能力をもっているかによって、目標成就の度合が変ってくる。この組織的活動能力は、集団の洞察性に関係している。すなわち、集団の自己決定は、集団のもつ洞察性に依存している。Lewin, K はこれを時間的展望という。ボールゲームにおいては、得点をあげることが、チームの目標であるから、チームはこのために瞬間、瞬間、行動を変化し、ゴールに近づこうとする。このチームの行動の変化は、成員の行動の変化によって生ずる。すなわち、成員は、ゲーム中のある時点において、1つの行動を決断し、選択しなければならない。それは、目標に向かって存在するいくつかの可能性のなかで、未来事態に適した行動であって、チーム成員間でお互に期待している行動である。このようにチーム成員の行動は、ある時点における事態の認知が、彼等の中で合致することによって可能である。集団の洞察性は、この事態の認知の程度をみることによって理解することができる。そこで未来事態における期待行動の合致についての調査によってこの点を確かめたい。

調査の手つづき

期日 昭和38年9月22日

場所 京都学芸大学サッカー部員5名

調査の方法

1) 観察場面

図2のようなコートを設定し、サッカー型(3対2)の攻防を行う。

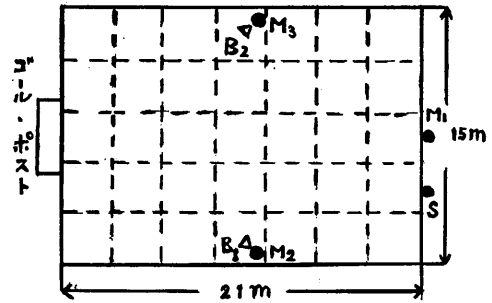


図 2

条件

- i SからM₁にボールを出したら行動開始
- ii M₁は必ずパスしなければならない。
- iii 2つのパスでシュートする。
- iv B₁, B₂は開始されたら、3対2の防禦の要領でよい。
- v 試技は10回おこなう。
- vi 1回毎に質問紙に解答させる。

2) 集団の構成

攻撃側 F.W. 正選手 2名(球歴平均6年)

防禦側 F.B. 正選手 2名(球歴平均5年)

3) 調査法

- i 攻撃チームの成員に1回の試技終了後質問紙(自由記述式)で解答させる。(M₁にボールが渡ったとき、どのように行動しようとしたか。M₂もしくはM₃に渡ったときはどう行動しようとしたか。)
- ii 行動観察法

以上の調査の結果、表2に示すように、各成員間の未来事態における期待行動の一致のしかたを3つの類型にわけることができる。

表 2 チーム成員相互の期待行動の合致と結果

相互の期待行動 一致のタイプ	成 功		失 敗	
	Pass 1	Pass 2	Pass 1	Pass 2
		2	1	
		2	1	
			2	2

これによってみると、お互の間に未来事態に即する期待行動の合致がみられない場合には目標を達成することができず、合致する場合には目標を達成することができることを示している。このように未来事態における期待行動が合致するというのは、成員の事態の認知が共通であると判断できる。以上のように、現在の事態にとどまらず、つぎに生ずるであろうところの未来事態の認知が共通であり、事態に即した行動がとり得るとき、洞察性が存在するといえる。その故にこの洞察性は、チーム・ワークの機能的要因となる。

4) 規則性

占処性、連絡性、洞察性は、チーム・ワークの機能的要因であることを考察してきたが、これらは相互に密接に関係している。たとえば、ボール・ゲームを行うチームの行動を観察すると、成員は、パスするためには、何処えパスするかを、受けるためには、何処で受けるかを事態に応じて決定し行動しなければならない。ここに3つの要因が関係しあっている。この諸要因を関係づけるはたらきが、個別的行動に全体としての意味をもたせることになる。すなわち、1つ1つの連絡は、個別的であって、その都度成員には、独自の判断が要求されている。この判断と、それにとまなう行動は、独自性ととともに全体として、意味を有しているのである。この成員の個別的、独自の行動が、目標との関係で、全体として意味をもつのは、成員の行動が、ルーティーン化していること、いわば手順が明確になっているからだと考えられる。このような成員の行動に手順がきまってくるはたらきが、個別的行動を全体として意味づける、いいかえれば、占処性、連絡性、洞察性を関係づけるはたらきであって、これを規則性と称したい。そうすると、チーム・ワークの機能的要因として考察してきた諸要因が、それぞれ規則性をもって関係しあっているときの集団の状態を、チーム・ワークといえることができるであろう。このことを確かめるために、小学校児童に、ボール・ゲームを行なわせて、成員の連絡行動を観察することによって、チームの規則性をもとめてみた。

調査の手づき

期日 昭和39年6月17日

場所 京都市立紫竹小学校

対象 同校 6年男 8名 4年男 8名

調査の方法

1) 集団の構成

Agr. 6年男 3名 H

Bgr. 6年男 3名 M

Df. gr. 6年男 2名 M

Cgr. 4年男 3名 H

Dgr. 4年男 3名 M

Df. gr. 4年男 2名 M

註

H ……社会性・技能 上位

M ……社会性・技能 中位

Df. ……ディフェンス・グループ

2) 実験場面

長さ15m、巾12mのコートを設定し一方の端にゴールハイ用台をおく。

3) 実験条件

i 各グループ共通にポートボールの3対2の攻防をおこなわせる。

ii 10回の試技(攻防)を行なわせる。

iii カット、アウト・オフ・プレーは1回の試技とする。

iv 試技毎にはじめの位置にかえる。

4) 調査法

行動観察法(パスのされ方、誰れがシュートしたか。最初にボール持った者は誰れか。について行動を記録する。)

以上の調査の結果を整理すると、被3、表4の如くなる。

表3 起点者と最初のパスを受けた成員間の規則性

gr.	項目	はじめにボールをもった成員	第一回のパスをうけた成員	回数
6年	Agr.	③	①	4
			②	2
		①	③	1
			②	2
	Bgr.	②	①	2
		③	①	3
		②	①	3
		①	③	1
			②	3
4年	Cgr.	①	②	2
			③	2
		③	②	2
			①	2
		②	①	1
	Dgr.		③	1
		②	③	4
			①	2
		③	②	3
		①	①	1
				0

① ② ③ 攻撃チーム成員

表4 シュートした成員とパスした成員間の規則性

gr.	項目	シューターに パスした成員	シュートした 成員	回数
6 年	Agr.	③	①	2
			②	1
		①	③	1
			②	1
	Bgr.	①	③	1
		②	②	1
4 年	Cgr.	③	①	1
			②	1
		②	①	2
			②	3
		①	③	1
		②	③	1
	Dgr.	③	①	1

これによってみると、1 攻撃の起点者) はじめにボールを持つ者) がきまってくる。2 シュート直前のパスをする者がきまってくる。3 シューターがきまってくる。4 多くの場合シュート直前のパスする者と起点者がおなじ者になる。という傾向をみることができる。スポーツ用語でいえば、ゲーム・メーカーとポイントゲッターがあらわれ、大体きまってくることになる。だからこのように、成員の行動が、インフォーマルであっても、占拠性、連絡性、洞察性という機能的要因が、規則性をもって関係しあうとき、その集団の状態をチーム・ワークと云うことができる。

また、6年グループと4年グループとを比較してみると、いずれもこの傾向を認めることから、程度の差、要因間の関係のしかたに差はあっても、チーム・ワークと称する集団機能が存在すると考えてよいであろう。

4 体育とチーム・ワーク

此の研究は、教育のなかに体育を位置づけ、その体育における集団機能として、チーム・ワークをとりあげた。そしてチーム・ワークを集団の表現するある状態とみて、その状態を構成する機能的要因として、占拠性、連絡性、洞察性をあげ、それらを関係づける機能として規則性をみちびいて考察してきた。はじめに限定しておいたように、ここで対象にしたチーム・ワークは、ボール・ゲーム場面における攻撃側集団にあらわれるそれであるから、もとよりチーム・ワークのすべてではない。この限りにおいて、このチーム・ワークと体育の関係を考えている必要がある。

体育において、われわれが、チーム・ワークと技術

とを指導する場合には、ただ身体的発達や試合の心構えを指導するだけではなく、この場面や領域の変化に適応する社会的条件を理解し行動できるように指導することが要求されてくる。たしかに技術は、生理的、物理的な事実である。しかし同時に心理学的事実でもあり、さらに社会的事実でもある。それは人間の行動の変化であり、環境への適応行動であるからである。その意味で、チーム・ワークの機能的要因が高かまることは、運動技術の上達に直結してくるものである。しかもこの技術が環境への適応行動として考えられるのであるから、チーム・ワークの指導は、Social Skill を形成することにもなる。しかし、形成という構造は、如何ともなし得ない力をもつものであって、しかもチームの活動力を支配する。この実体をあきらかにすることは可なり困難である。しかし、人間の形成にチーム・ワークが、集団機能として以上のように関係していることはみられるのであるから、さらに、集団機能の研究を進めることから、体育における集団の個人に及ぼす影響(体育による人間形成)をあきらかにしていく必要がある。

参考文献

- (1) 体育と人間関係 浅井浅一
- (2) Theory and Problems in social psychology 1948 Krech, D
- (3) Frontiers of group dynamics 1947 Lewin, K
- (4) 体育と人間関係 浅井浅一
- (5) Social Organization 1909 Charles, H. Cooley
- (6)(7)(8)(13) 小集団の社会学(訳本) オルムステッド訳 馬場明男他
- (9)(10) 体育と人間関係 浅井浅一
- (11) Human Groups 1958 W. J. H. Sprott
- (12) Mind, Self, and Society J. H. Mead
- (14) グループ・ダイナミックス研究1 グループダイナミックス学会
- (15) 小集団 青井和夫
- (16) 体育と社会的人間 浅井浅一
- (17) The dictionary of sports 1946 A. S. Baranes
- (18) 体育の心理 後藤岩男
- (19) 社会学辞典 有斐閣
- (20) 体育学研究 7 竹内
- (21) 社会心理学 T.M. ニューカム 森 東吾訳
- (22) 体育と社会性 浅井浅一
- (23) 体育と社会的人間 浅井浅一

- (24) 体育学研究 7 浅井・穴迫 (1960)
 (25) 体育学研究 8 竹内 (1961)
 (26) 体育学研究 9 竹内 (1963)
 (27) 整理学 加藤秀俊
 (28) 体育学会 (発表) 竹内 (1964)
 Team Work in Research F. Pike
 体育の哲学 浅井浅一・他
 社会心理学 千輪浩編

Summary

1. In this paper we have tried to show the position of physical education in school education and have treated team work as a group

function in physical education.

2. Team work is a representation of a certain group condition.

We may mention the following as functional factors that will constitute the condition: occupation (of a position), concert, and seeing into the future (insight).

3. We have considered the function which co-ordinates these three factors as routine.

Team work treated here has been limited to that which appears in the offensive group in the situations of ball games.